

パネル・ディスカッション "Our JASCA"

パネリスト

安西眞（北海道大学） 高田康成（東京大学）

Douglas Cairns（The University of Edinburgh）

コメンテーター Ahn Jaewon（Seoul National University）

司 会 葛西康德（東京大学）

要 旨

安西眞

「私たちのJASCA」が、あくまでも理想的に言うてであるが（理想的というのは、私たちの学問的水準がそれに応じられるほどのものでありえるようになった時、という意味である）、人間がギリシアやローマの古典を読む、ということに積極的な貢献ができるか、という問いを立てるとする。あくまでも今付したところの条件下でという、留保とともに、論者はイエスと答えたい。その理由はただひとつ。私たちが、ギリシアやローマの古典を自分たちの古典と見定め、研究を続けてきたヨーロッパの人間たちの長い経験を外から見つめる視線を持ちうるからである。そして高田氏の言う「鎖国主義が通用しなくなっている」は、本来ヨーロッパで行なわれてきた古典研究という長い学問運動についても、あてはまるはずのことだからである。

偶々、論者は2年続けて韓国と中華民国の古典学研究者たちに招待され、交流を持つ機会があったが、そういう「外からの」という認識の場所を我々東アジアの同僚たちが共有しているということについて、そして、その視線の共有に関して理解しあうことが、恐らくは東アジアという文化的な文脈の中で古典学が発展するための健全な土台であるだろう、ということについて、理解が成立しえたと思う。言うまでもなく、彼らとこれから何かを共有する為には、「西洋古典学研究」は、今のところ貢献できず、JASCAだけが、現在我々が持っている貢献手段である。

高田康成

人文研究における鎖国主義はもはや通用しなくなっている。

世界的に、19世紀的な人文系の学問分野の枠組み（「哲・史・文」）が実質的に崩壊し、細分化も極に達している感があるが、そのような中で我々日本の西洋古典学は、あらたな枠組みとその中における役割に関して、模索を始める好機を迎えていると言える。

そのような新たな枠組みへむけての試みの例としては、例えば、ユーラシア大陸の端に位置し、あらゆる古典が流れ込み、それらをそれなりに受け入れて来た日本の特質を生かして、「比較古典学」というような学問分野の創設に役割を果たし、その発展の中核となる役割というようなことが論者の頭の中にはある。

Douglas Cairns

安西、高田、両名の見解を踏まえ、ヨーロッパ古典学の指導的立場から、あるべき古典研究の形ということについて述べる。